

タバスコがやめられない

PZ 生方冬馬

あらすじ

何にでもタバスコをかけることをやめられない沙也加。

タバスコのせいで彼氏に振られてしまう。次こそはいい彼氏を捕まえるぞ、と決意した沙也加はタバスコを封印する決意を固めるが…。

人 物

藤並沙也加（24）会社員

中井聡太（24）沙也加の彼氏

橋本千歌（24）沙也加の友達

川端 樹（25）千歌の彼氏

鶴橋涼太（24）樹の知り合い

○三鷹・回転寿司・店内（夜）

藤並沙也加（24）と中井聡太（24）

が席につく。タブレットを覗き込む二人。注文をする。

中井「腹減った。俺、サーモン食べたい」

沙也加「私、赤貝食べたいな」

ニコニコ顔で寿司を待つ二人、商品が届く。取って、中井は醤油をかける。沙也加、笑顔でバッグからタバスコを取り出す。中井、真顔になる。

中井「ねえ、寿司にもかけるわけ？」

沙也加「うん。美味しいよ」

沙也加、赤貝にドバツとタバスコを掛けて、美味しそうに食べる。中井、嫌そうな顔。

中井「寿司だからさ、タバスコやめてよ。不味くなる」

中井、ちまちまとサーモンを食べる。沙也加、不思議そうな顔をして中井を見つめる。

沙也加「タバスコは何にでもあうよ。万能選手なの！」

沙也加、次の皿にもタバスコをドバっ
とかける。皿の上はタバスコで真っ
赤。中井、箸をテーブルに叩きつけ
る。

中井「あー、もうヤダ！ピザもタバスコまみ
れだし、ドリアも真っ赤。まさか、寿司に
までタバスコかけると思わないじゃん！」
中井、不満をぶちまける。沙也加、不
思議そうにしている。

沙也加「えー、なんで？タバスコかけるでし
ょう？」

中井「見てるこっちまで辛くなる。もう、限
界」

中井、バッグを持って席を立つ。

中井「もう、勝手にタバスコかけてるよ！」

沙也加「えっ、聡太くん……」

中井、店を出ていってしまふ。残され
た沙也加、呆然としてしまふ。

○三鷹・BAR（夜）

沙也加、カウンターに突っ伏して
いる。橋本千歌（24）、カクテルを片手
にケラケラと笑っている。

沙也加「千歌、笑わないでよ。落ち込んでる
のに」

千歌「だって、だって、進歩がないんだも
ん。笑うでしょ」

沙也加「何が悪いって言うのよ」

千歌「笑えるよね」。毎回、タバスコで振ら
れるの。何人目よ」

笑い続ける千歌を小突く沙也加。カク
テルを握りしめて、煽る。

沙也加「覚えてない。あー、タバスコ足した
い」

千歌「やめなつて。流石にバーテンさんに失
礼だから」

沙也加「タバスコ」

千歌「タバスコ好きなのはいいけどさ、時と場合をわきまえないよ。沙也加は清楚な見た目で得しているんだから。悪い癖だよ」

沙也加「そうは言われても」

千歌「それか、彼氏を我慢すれば？好きなだけタバスコかけなよ」

沙也加「それもさみしいより」

沙也加のメソメソ具合に笑いが止まらない千歌。

千歌「あー、そうだ。タバスコ我慢できるなら、いい人、紹介するけど」

沙也加「いい人？本当に？」

千歌「タバスコ、我慢するならね」

沙也加、考え込む。

千歌「あ、おかわりください」

千歌、バーテンからカクテルを受け取る。

沙也加「わかった。我慢する。だから、紹介して」

千歌「本当に？」

沙也加「本当に、我慢する」

沙也加、バッグからタバスコを取り出して千歌に押しやる。

千歌、にやりと笑って。

千歌「それじゃ、セッティングしてあげる。

こんなハイスペックな人そうそういないからね」

○日本橋・料亭・個室

沙也加、千歌、川端 樹（25）、鶴橋

涼太（24）座敷に座って談笑してい

る。沙也加、涼太の顔をぼーっと見つめている。千歌、沙也加を肘で小突く

千歌「沙也加、樹には会っているよね。私の

彼氏。で、隣が涼太くん」

川端「涼太は俺の大学の後輩なんだ」

沙也加「確か慶応ですよ。優秀な方なんです
ね」

鶴橋「いや、川端先輩に比べればたいしたところ
ないですよ」

川端「謙遜するなよ。引く手数多だったじゃないか」

沙也加「それじゃ、お勤めも……」

鶴橋「いや、結局、実家を継ぐことになりまして、修行中です」

沙也加「ご実家、ですか……」

千歌「涼太くんの実家すごいんだから。赤坂の老舗料亭なの」

沙也加「えっ！それはすごいですね」

仲居が入ってきて料理を出していく。

鶴橋「美味しそうですね」

川端「お前の口にあうといいんだけどさ」

鶴橋「やめてくださいよ。先輩。まだ、修行中です」

千歌「いただきます！」

▲人、各々料理に手を伸ばす。

千歌「お出しのお味が優しいね」

川端「会席って、俺、初めてかも。どう、涼太。前の実家と比べて」

鶴橋「美味しいです。比べるのは野暮つても
ですよ。先輩」

和気あいあいと会話を楽しむ、千歌、
川端、鶴橋。沙也加、黙って食事に手
を伸ばしている。

沙也加「お、美味しい？わかんない。薄
い。ああ、タバスコかけたい！」

千歌「沙也加、大丈夫？」

沙也加、ちよつと引きつった笑顔。

沙也加「え、ええ。大丈夫。素材の味がし
て美味しいです」

千歌、沙也加に囁く。

千歌「タバスコ、ダメだよ」

沙也加「わ、わかってるってば」

鶴橋「お口にあいませんか？」

沙也加「いえ、こんな高級な料亭、初めてな
ので緊張してしまっ」

鶴橋「慣れないと緊張しますよね。食事は楽
しむのが一番ですから。力を抜いてくださ
い」

沙也加「そうですよね。やだ、恥ずかしい
…」

沙也加、上品に箸を動かして食べてい
く。

○三鷹・BAR（夜）

カウンターに沙也加、千歌が座ってい
る。酔っ払っている二人。カクテルグ
ラスを持っている。

沙也加「鶴橋涼太くん、かつこよかった！す
ごい好み！最高！」

千歌「でしょう！絶対、沙也加、氣にいろ
思っただよね！」

沙也加、カクテルグラスをダンツとカ
ウンターに置く。

沙也加「なのに！料亭の息子だなんて！神様
の意地悪！！」

千歌「あはははは、タバスコかけられないね
）。あはははは…」

沙也加「人ごとだと思って！今日の料亭の料理だって、味がわかんなかった！タバスコかけたい！」

千歌「味覚障害なんじゃないの。それはそうと、どうすんのよ。涼太くんと」

沙也加「味覚は普通です。タバスコは趣味なんです。あ、おかわり！」

沙也加、バーテンからカクテルを受け取る。

沙也加「あのあと、涼太くんからLINEもらってる。今度、二人で映画行くことになった」

千歌「やったじゃん。涼太くんもまんざらでもないってことでしょ。頑張ってる」

沙也加、カウンターに突っ伏して。

沙也加「でもでも、涼太くんの前でタバスコかけたら」

千歌「振られちゃうね」

沙也加「我慢するの辛いよ。千歌、どうしよう」

千歌「恋を取るか、タバスコを取るか。究極の選択だね。頑張れ」

沙也加「軽くない？ 私は真剣に悩んでいるのに！」

千歌「まあ、しょせんは他人の人生ですし。好きにすれば」

沙也加「あり、千歌がひどい。涼太くんはハイスペックだし、実家も太いし。顔もすごい好みの！これ以上ない相手なの！でも、タバスコ」

千歌「過去の経験に学ぶなら、我慢するしかないね。実際、沙也加の欠点でタバスコくらいじゃん」

沙也加「そうかな。そうかな」

千歌「褒めてないよ。タバスコが目立ちすぎているだけで、他の欠点が見えないだけだと思うし」

沙也加「わかった！タバスコ止める！」

沙也加、カクテルグラスを握りしめて誓いを立てる。

馬冬方生